

最初の発見者

たかし よいち

松瀬さんが考古学に興味を持つようになったのは二十歳ごろでした。

農家のひとりむすこに生まれた松瀬さんは、小学校を出るとすぐに家の手伝いをして農業にはげみました。

ある日、いつものように畑を耕していると、まるでガラスのようにピカピカに光った黒いものを見つけました。それは三角形で、先のとがった矢じりのような形をしていました。でも、松瀬さんにとってははじめて見るものでしたから、なんだか見当が付きません。

松瀬さんは、さっそくそれを小学校で教わった先生のところへ持っていったはずでした。「ああ、いいものを見つけたね。こりゃ大むかしの人間が狩りをするときに使った矢じりだよ」



【福井洞くつ】 国指定史跡

佐世保市吉井町にあります。

旧石器時代の末期から縄文時代の初めの遺跡で、一番下の層から発掘された石器は、三万年以上も前のものです。

先生からはじめて矢じり石のことを教わった松瀬さんは、びっくりしました。それから松瀬さんは、すっかり考古学のとりこになったのです。

松瀬さんは、ひまを見つけてはじぶんの家のまわりの畑をしらべてみました。すると、それまでだれもあまり気にもとめなかった石器や土器が、あっちからもこっちからも見つかりました。

小学校しか出ていなくても、松瀬さんは独学で勉強をはじめました。大むかしのことが書いてある考古学の本を買ってしらべたり、考古学者がやって来たときなど、じぶんが発見したのを見せて教えるうけました。

こうして松瀬さんはじぶんの郷土をこつこつと歩いてしらべてまわりました。そのせいで松瀬さんは、それまでよくわかっていなかった大むかしの遺跡をいくつも発見したのです。なかでも福井洞くつの発見は、日本中をびっくりさせた大発見でした。それまで、福井洞くつには、神社がまつてありましたから、だれもまさかそこが大むかしの人たちのすみかなどとは思いませんでした。

ある日、松瀬さんはいつものように野あるきすがたのままでふらりとそこへやってきました。いままでなんどか、そこへ行ったことはありませんでした。

でも、そのときはただなんとなく、お稲荷さまのやしろがまつってある、ほらあなだなどいうことで、そのまま見すごしていたのでした。

ところが、こんどあらためて洞くつの前に立ってみた松瀬さんは、いっしゅん、はっとしました。

「ひょっとしたら、ここは、ただのお稲荷さまをまつたほらあなではないのかもしれないぞ」
松瀬さんの目は、ほらあなの中に注がれました。

松瀬さんはそのとき、ほらあなのすみっこに小さな焼きもののかけらがあるのを見つけました。

ひろってよく見ると、それは、まぎれもなく縄文時代の土器でした。

「縄文土器だ！」

松瀬さんは思わずこうふんした声で、つぶやきました。

それは、まだ人間の祖先が、狩りや漁でくらしをたてていたころの土器です。
だれかがいたずらに、ほらあなの中へ投げこんだのでしょうか……。

「そんなはずはない。ひょっとしたら、ここに縄文時代の人たちがすんでいたのかもしれないぞ」

松瀬さんは、外に出るときたえず身に着けている携帯用の小さなシャベルで、そのまわりを掘ってみました。三〇センチほど掘りさげたところから、またもやおなじ縄文土器のかけらが、こんどは、三つも四つもかたまりになって出ました。

「やっぱりそうだ、ここは大むかしの人びとのすまいのあとだ」

松瀬さんは新しい発見に胸をおどらせました。それまで、長崎では大むかしの人びとが生活していた洞くつ遺跡のことはよく知られていませんでした。

もし、そこが縄文時代のすみかだったことがわかれば、たいした発見です。

「さてよ」

松瀬さんは、またじっと考えこみました。

三〇センチ掘った下から縄文時代の土器が出てきましたが、その下をさらに掘れば、なにも見つからないでしょうか、ひょっとしたらさらにもっと下に、縄文時代より古い時代のなにかが見つかるかもしれません。そんなことを考えると、松瀬さんの胸はいっそうはずみしました。
このほらあなの中を掘ってみれば、いままでにわからなかった、大むかしのなぞがときあかせるかもしれない。

しかし松瀬さんは、これは、じぶんたちのようになしろうとがやることではない、と思いまし

た。

考古学者に来てもらって、正しい発掘調査をやってもらわなければいけない。

松瀬さんは、ほらあなで土器を見つけたことはだれにもいいませんでした。もし、そのことを聞きつけたものずきが、勝手にほらあなを掘って、うずもれているものをめちゃめちゃにしてしまうかもしれないからです。

松瀬さんは、やがてそのことを考古学者の鎌木義昌先生かまき よしまさや芹沢長介先生せりざわ ちやうすけに知らせました。こうして、前にもおはなしたように第一次の発掘以来、四度にわたる発掘の結果、日本の大むかしを研究するうえでもかけがえのない、大遺跡であることがわかったのです。

もし、松瀬さんが、そのとき、洞くつへ行って、ひよっとしたら、ここに大むかしの人たちがすんでいたのかもしれない……と思わなかったとしたら、おそらくこんな大発見にはつながらなかったでしょう。

わたしは、ぼつりぼつりと、ものしずかに語る松瀬さんのおはなしを聞き、ひとりの人間のかげの力がどんなに大きいかを知りました。こういう人がいたからこそ、考古学者による輝かしい研究ができたのです。

松瀬さんは、最後にわたしにむかってこんなことをいいました。

「わたしたちは、考古学者ではない、あくまでもしろうとです。しろうとが考古学者のまねをしてはいけない。だから、わたしはけっして発掘はやりません。わたしの役目は、だいいな遺跡をみつけて、考古学者に知らせてあげることなんです」

なんとりっぱな心がけなんでしょう。とかく、遺跡をみつけると、まっさきに掘りたがるものです。しかし、それは大きなあやまりです。

発掘するためには、たいへんな知識と技術が必要です。なまはんかな技術で、発掘をはじめたら、それこそ遺跡をめちゃめちゃにしています。

松瀬さんは福井洞くつのほかにも、福井川の流域にある直谷なおやというところで岩かけを見つけ、そこから石器の破片を発見して考古学者に知らせました。

また、おなじ福井川ぞいの観音洞くつでも石器のかけらをみつけて知らせました。

昭和四十四年、長崎新聞社は、この松瀬さんの地味な功績をたたえて、長崎新聞文化賞をおくりました。またよく年、吉井町では松瀬さんを名誉町民にえらび、吉井町名誉町民の称号をおくりました。

たかしよいち『まぼろしの日本原人』（国土社）より